

児童の自己有用感を高め、お互いを認め合える学級づくりの工夫

— 気持ちを伝える『ありがとうの木』と家庭と連携した『メッセージカード』の活用を通して —



特別研修員 生徒指導・教育相談 荒井敏明（小学校教諭）

【児童の実態】(課題)

- ・友達と上手に関わるができない場面がみられる。
- ・自分の良さに気付かず、十分に自信を持つことができていない児童もいる。

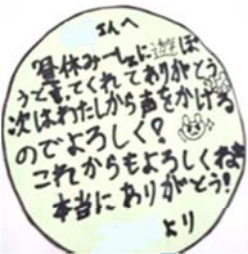
【目指す児童像】

自己有用感が高まり、
お互いを認め合える児童

〈手立て①〉

「ありがとう」「がんばったね」の気持ちを伝える活動

友達の様子を事前によく見ておき、「ありがとう」「がんばったね」の気持ちを葉っぱシートに書きました。その際、自分の気持ちも加えて記入しました。



- 葉っぱシートを渡すときは、
- ①相手の目を見て
 - ②笑顔で
 - ③一言添えて
- を意識しながら

「友達からのありがとうの気持ち
がうれしかったです。これからも
友達がうれしくなることをしてい
きたいです。」

「ありがとうの木」の作成

もらった葉っぱシートは、個人用「あ
りがとうの木」と教室用「ありがとうの木」
に貼りました。



個人用

「ありがとうの木」は、いつでも目
にすることができるように掲示し
クラスのシンボルになりました。



教室用

〈手立て②〉

保護者へ「ほめる・認める・励ます」ことの投げかけと
家庭と連携した「メッセージカード」活動

「運動会でのがんばり」の手紙をもらい、
全員ニコニコ笑顔になりました。



「運動会ががんばって
よかった。これから
もがんばります。」

「少し照れ
くさいけれ
ど、お母さ
んから、一
生懸命踊っ
たり走っ
たりする姿
を見て感動
したよと言
われて嬉し
いです。」

家庭での子どもの頑張りに対して、保
護者からも「ありがとう」「がんばったね」
の気持ちを、葉っぱシートに書いてもら
いました。



保護者からの「がんばったね」の葉っ
ぱシートを根元に貼り、児童と保護者
が一体となった「ありがとうの木」完成。

成果と課題 (◎成果 ○課題)

- ◎友達と保護者から肯定的な評価を受けることで、子どもたち同士で友達のよさや個性を認めて自己有用感を高めたり、友達に対し
て優しい発言が増えたりする場面が多く見られるようになった。
- ◎学校からのみでなく、家庭からも同様に「ほめる・認める・励ます」という活動を行ったことが、児童の自己有用感の向上に大きくつ
ながり、普段から落ち着いて生活できるようになった。
- 授業中だけでなく普段の生活の中でも、互いを認めたり、励まし合ったりする姿が広がるように、さらに工夫していく必要がある。
- 友達とより良い関係づくりをしていくために、ソーシャルスキルトレーニング等を取り入れ、人と関わる回数を増やしたり、上手な関わり
方を学んだりしていくことが必要である。